
リ シ ダ ス

ジョン・ミルトン作
鷺見 中嶺訳

この獨白的哀悼詩に於て、作者は、1637年、チェスタァより船出して航海中、不幸にもアイルランド海にて溺れたる、学識並びなく秀れたる友の死を悼み、且つ併せて、いまわが世の春を^{ことほ}寿げる、わが国の腐敗せる僧職者達に、やがて滅びの時の至らんことを告ぐ。

されどいまひとたび、おお汝等月桂樹よ、しかりいまひとた
び、

1

汝等薄墨色のテンニンカと常緑の蔦よ、
余は汝等の未熟にして渋き実を摘み、
心ならずも拙き指もて

成熟の時未だ到らざるに、来つて汝等の葉を散らさんとす。

5

抑え難き切なる思いと、悲しき極みの惨しきことが、
汝等の実り散るよろしき時季^{とき}を我をしてやむなく乱さしむ
その故は、リシダスが死したれば、青春の盛時を待たずして
若きリシダスが、——学識の彼に類^{たぐ}ふべきものなかりしに。

されば、誰れかりシダスのために歌はんと欲せざらん。

彼自ら詩歌の道^{たしな}を嗜み、いと高き調べを奏でぬ。

水^{ひつぎ}を柩とし、彼のために哭するものもなく波に漂い

涙の弔歌の手向けなく

乾風に吹き曝^{さら}されてあるべきならねば。

されば、始めよ、ジョーブの神の祭壇の下より湧き出づる 15
聖き泉の姉妹達、
始めよ、さなり、やや音高く、弦^{いと}かき鳴らせ、
無益なる拒^{こば}みとためらふ口実をやめよ。
われが今リシダスを悼^{うたびと}める如く、誰か心ある詩人
余が冥福を祈る言葉もて、余の定められたる死を弔い、 20
ゆきずりに道^まを枉げ
余が暗^{おくつ}き奥津城に鎮魂の辞を聞かしたまへ。
何故ならば、我等は同じ丘に生い立ちて、
泉^{こかげ}、樹蔭、小川^{ほと}の辺りに同じ羊の群^{やしな}を飼いたればなり、
相ともに、朝^{あした}が臉^{まぶた}を開けゆくにつれ 25
丘の上の草地のしらみゆく前、
羊の群を野に追いつ。また相共に聞きぬ
羽虫が暑苦しき羽音たて飛ぶを。
また夜も更けて露の新たに降りる頃まで——
幾そたび、夕べに輝き出づる明星が、天^{あめ}の坂を 30
西の方へと、回転の輪を傾けつくすまで——
羊の群を肥らせつ。
さればとて、かゝる間^{ひま}にも、麦笛の音にあわせたる、
鄙^{ひなうた}歌に耳塞^{かたぎ}しにはあらず、
むくつけきサタァは踊り、蹄^{ひづめ}の裂けたるフォーンは 35
楽しき歌聲を長くは隔てず、
されば老ダミータスはわれらの歌を聞くを歎びぬ。
あゝされど、甚^{いた}くも変りはてぬ、汝^{なれ}あらぬ今、
汝^{なれ}逝きて永久^{とわ}に帰ることなき今、

汝を、羊飼いよ、汝を森も、麝香草、八重葎閉ざすうつろな

る風穴も 40

そこに棲む木霊もすべて悼み悲しめり。

柳、様、緑の木立が

汝がやさしき歌にあわせてその葉を楽しく揺がすを

今ははや見ることなれば。

薔薇の葉を喰う尺蠖、 45

乳離れしたるばかりの、草喰む仔羊にとりつく寄生虫

或は山檜の咲き初める頃、

早春に咲き出でる花の容色害う霜の如く

リシダスよ、汝が計は羊飼いの耳を傷めぬ。

いづこにありし、ニンフ等よ、無慈悲なる海が 50

汝等の愛おしむ、リシダスの、頭上を閉ざせし時。

汝等の古き詩人、高名なるドルーイッドが眠る、

丘にて戯れ居たるにもあらず、

またモウナの山の鬱茂たる高き嶺にも、

またディー河の魔の流れ漲るところにもあらざりき。 55

悲しい哉、愚かにも我は想う、

かの時汝等かしこにあらましかばと——ありとて何をかなし

得たりし。

オーフェーズを生みたるミューズすら、

かの恐ろしき喚聲あげたる狂信女により、

血に塗れたるオーフェーズの首、ヒブラスの川に投げ入れら

れ、 60

早き流れをレスボスの岸に流れ下りし時、

大自然の万象歎き悲しみしという

禽獸草木をも魅了せる我が子のため、何事をもなし得ざりし
ものを。

あはれ、何の益ぞあらん、不斷に心を勞し、
卑しみ蔑さげすまれたる羊飼のなりわいにいそしみ、

65

みしるしなき詩神にひたすら身を献ぐとも。
常人のなすごとく、木蔭にてアマリリスと戯れ、
或は、ニーアラの卷髪まきげを弄ぶ方ぞ、

まさりたらずや。

榮譽ほまれは高志こころの人の精神こころを奮いたゝす鞭、
(高貴なる精神こころもお逃れ得ざる弱味なれど)

70

歡樂なを無みし苦難くるしみに満てる日を過ぐす鞭、
されど我等が相応はしき報いを見んと望み、
一躍して栄光裡さかに頭れ出でんとする時、

盲目のフューリ厭はしき鋏を携え来りて、

75

細き玉の緒を断つ。「されど稱讚を断つことなし、」と、
フィーバスは答え、ふるえ戦おのける耳に觸れぬ。

「真まことの榮譽ほまれは人界の土に育つ草木にあらず、

また下敷の箔に引立てられて

世に輝き出でるものにも、また普く広き世評に存するにあら
ず。

80

すべてを裁きたまうジョーブの神のかの清き眼まなこと

全まき慧眼けいがんとによりて生き且つ高く広く伝わるなり、

御神が各の行みかみに最後おのおの審判ぎようを下したまう時、
御神が各の行みかみに最後おのおの審判ぎようを下したまう時、

汝がうるに相応はしき報いを天界に於て期待せよ。」

おお、アレトウサーの泉よ、また汝^{なれ}牧歌に名を得たる流れ、 85
 聲出す葦の冠よそおえるミンシァスの滑らかなる流れよ、
 われ耳にせるかの調べは格調いと高くましましき。
 さもあれ、我は今再びわが麦笛のことにかへり
 ネブチューンの弁^{べん}疏^そのために来れる
 海の使者トライトンに傾聴なさん。 90
 彼は波に問い、また非情の風にも尋ねつ、
 「いかなる禍^{まがつひ}津日ぞ、この秀れたる若^{わか}人の生命^{おこうど}奪ひ取りしは」
 と。

また一つ一つの嘴^{はし}なせる岬より吹き出づる
 ありとある荒^{はね}き翼^はある疾^{はや}風にも問いたゞしたれど
 皆若人の消息を知らずとなん。 95
 さらに賢者ヒポタデス風どもの返^{こたえ}答^え持ち来る。
 一陣の風もわが岩屋より迷い出でたるはなし、
 空は静かに、洋々と凪ぎわたりたる海上に、
 肌滑らかなるパノペー^{いも}妹らすべてと戯れ居たり、
 汝^{うやま}が敬^{こうべ}えるかの頭^こを海中深く沈めしは 100
 日蝕に建造なし、暗き呪いもて装備されし
 不吉不信なるかの船の所為ならん、と。

次に尊^{をきな}き老翁、ケイマス、静々と歩みを運びぬ、
 彼は水草の外衣まとい、菅の冠を戴く、
 縫いとりの絵模様ものふりてさだかならねど、縁^{ふち}に 105
 紫の花さながらに哀^{あい}々の文字をしるしたり。
 「あゝ、奪ひ取りしは誰ぞ、わが最愛のいとし子を。」と彼は
 言へり。

最後に来り、最後に去りしは、
ガリリー湖の水先案内セント ピーター
彼は二種の金属にて作りたる大いなる鍵二つ持てり、 110
(黄金なるは開き、鉄なるは固く閉ざすに用う)
彼は法冠つけし頭髪うちふるわして厳かに宣ぶ、
「若人よ、汝に代ゆるためならば、
口腹の慾のため羊の檻に
秘かに這い寄り、押入り、攀ぢのぼる徒輩、 115
かゝる徒輩を我れあまた見捨てるを得たらんに、
彼等は羊の毛を刈る祭日に食を争い
招かれし尊き正客を非礼にも押し出すの外
己が成すべき何事にも心を用いざるなり。
貪慾に盲たる者よ。彼等は牧人の杖執る術を知らず 120
また忠実なる牧夫の務はもとより、他の何事もを學びたるこ
となきなり。
いかで彼等はかゝることに心を勞せん。何の要かあらん。
飽食煖衣を貪るのみ。
稀れに歌う彼等の歌は、空疎にして俗臭にみち、
耳障りなる音を出だすいとわしき藁笛を吹くに似たり。
餓えたる羊は見上ぐれども腹満たされず、 125
悪気毒気を吸いて五体はふくれあがり
内臓は腐爛し、忌はしき疫病は蔓延す、
あまつさえ、恐ろしき狼足音を忍び
日毎餌食を速かに貪りてあるに、敢えて咎むるものもなきな
り。
然れども、かの双手もて打振り大剣戸口に 130

一撃を加ふべく用意されてあり、然り一撃にてこと足らん。」

帰り来れ、アルフェースよ、汝の流れを^{ひる}怯ませし
 恐ろしき聲は過ぎ去りぬ。帰り来よ、シシリーのミュージズよ、
 而して谷々に呼びかけ、こゝに来て投げよと告げよ、
 風鈴草、^{ちいろ}千色の小花を。 135

木陰、そよ風、石走るいさゝを^{さふや}がはの囁き
 やさしく常に絶えざる汝等低き谷間——
 そが爽やかなる窪地を大犬星の眺むること稀れならんも——
 投げよこゝに、緑の草地にて甘露の^{しゅうろ}驟雨吸いとりて、
 大地をなべて春の花もて華やかに彩る、 140
 珍らしき色とりどりの花を。

伴い来れ、日の神に見捨てられ、はかなく^{しほ}凋む早咲きの桜草、
 房なす花の金鳳花、薄色の^{きそけい}黄素馨、
 白い石竹、黒い^{まだらすじ}班條ある遊蝶花、
 鮮かに^{かぐや}煌く色の堇花、 145
 麝香薔薇、^{あて}艶やかな頭飾りつけたる^{すいかつら}忍冬、
^{うれ}憂いの頭垂れたる蒼ざめしきばなさくら、
 悲哀の飾りしたる花すべてを。

告げよ、不凋花には、そが美をすべて降り注げよと、
 水仙花には、その盃をすべて涙もて満たせよと、 150
 月桂樹もて飾られしリシダスの柩に撒き散らすため。
 そは、われらがはかなき思いをして、偽りの空想と戯れしめ
 いさゝかにても悲哀を和げんためなり。

悲しい哉、かゝる間にも、岸辺が轟く波とともに汝を
 遠く遙かに押し流し、汝が骨をいづこに運び行くとも—— 155

風荒きベブリディースの彼方に、
——そこにて恐らく汝は逆巻く汐の下に
怪物の群れ棲む海底の国を訪れん——
或は岩ある山の大きいなる幻が
ナマンコスとバヨナの岩の方を眺むるところ、
われらが涙もてする願ひも空しく
古きペレラスの伝説にゆかりある辺りに眠るとも——
大天使よ、いざ、故郷の方を眺め、憐みをおこしたまえ、
而して、汝等海豚よ、薄命なりし若人を背に浮べて来れ。

160

泣くをやめよ、悲歎にくれたる羊飼達よ、泣くをやめよ、
何故なれば、汝達の悲しめるリシダスは死せるにあらず、
水の床の下に沈みたりとも。
その如く、日の星もまた大洋の床に沈む、
されどやがてうなだれし頭を上げ、
光の装いとゝのえ、金色の光新らしく
朝の空の額に赫々と燃え出づるなり。
されば、リシダスもまた海中深く沈みたれど、
波の上を歩みたまひし神の尊き御力により、高きにのぼりた
れば。

165

170

此土になき、森と小川のほとりにて
清らかなる神酒もて潮に濡れたる頭髪濯ぎ、
慶びと愛により祝福されし忍辱の国にて、
えもいわれぬ婚姻の歌を聞く。
彼処には在天の聖徒なべて嚴かな集いなし、
親みなごみて楽しく彼をもてなす、

175

合唱なし、歌いつゝ天界の栄光に包まれて歩み、180
 彼の两眼より永遠とこしよに涙を拭いとりたまふ。

されば、リシダスよ、羊飼い達も、泣くをやめよ、

今より後汝なれは、汝なが大いなる報いとして、

この岸まもの守護りがみ神となり、

危険なる海路うみじに迷う諸人もろびとを利益りやくせん。185

かく歌いぬ、無名の若人は極と流れに、

静かなる朝が灰色ぐつの沓くつはきて出で行く間。

彼は熱き思いもてドリアの歌を口遊くちずきみつゝ、

音色やさしき葦笛のさまざまの調べ奏しぬ。

かくて今、日はすべての丘の影、長く引き延ばしたるかと思

う間に、190

西の入江にと沈みけり。

やおら彼は立ちあがり、青き外衣を手早く身にまといぬ。

明日はまた新なる森、新なる牧場へ赴かん。